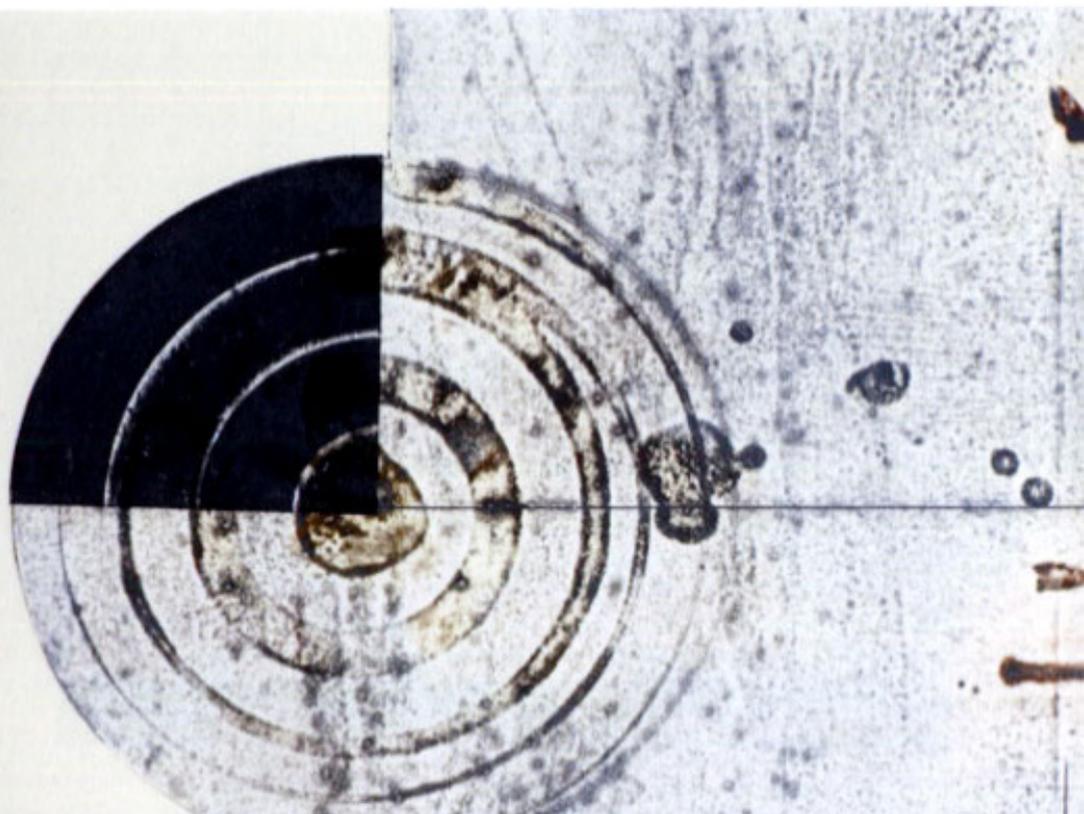


第 105 号

# 船 団

特集

ねじめ正一の言葉



●俳句30句

## ねじめ正一

# 野球

マウンドを拝む人あり子規忌かな

春寒く舌打ち多いアンパイア

戦力外選手の眉に曼珠沙華

初回から攻撃長く草の餅

王ひとり長嶋ひとり春の道

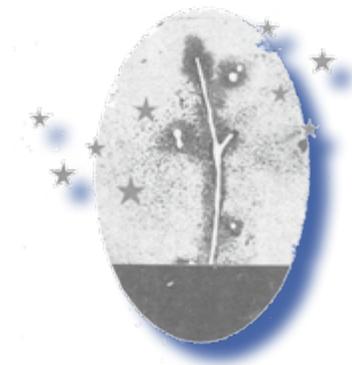
ロートルの小便カーブ風薫る

グローブの土手を叩いて春よこい

グラブからボール跳ね出て春の月

陽炎にショートバウンド投げてみる

背を丸め連敗投手しじみ汁



春一番一日二回隠し玉

子供の日手加減なしのヤジが飛ぶ

聖五月アンダースローの手首なる

梅雨寒し監督室は広すぎる

七月の羽生えてくる統一球

梅雨開けてスパイク磨くベンチ裏

神宮の万緑場外ホームラン

神宮の夕立去りて打撃戦

西日中ホームスチール決行す

炎天のファウルチップに度胆抜く

キャッチャーの膝が物言う炎暑くる

球場にベースみたいなお化け出る

天高く野球少年亜脱臼

肘痛の湿布代わりの唐辛子

今シーズン中継ぎ抑えとろろ汁

外野手が満月獲って二軍落ち

神宮のポール引き抜き星を打つ

野茂の目はちらと輝くクジラの日

虚無主義とバット一本冬籠り

球春は長嶋茂雄のことである

辻村 拓夫

鉄橋を見上げて笑う百合鷗  
指先の空く手袋で抱きしめる  
梅咲いておばちゃんの声臙脂色  
風花の隣り町までさすらいぬ  
蠟梅の香りと菓子味のがして  
古草の藤ノ木古墳暮れなすむ  
オペラ座の怪人響く卒業曲

津田 このみ

長閑しやペンギンのする白き糞  
母が押す春風が押すベビーカー  
まぼろしの姉母祖母と土筆摘む  
肉体の外へ出てゆく雪野原  
雪明り小さな声で話すかな  
水鳥に引きこもり派とエンジヨイ派  
雪こんこ此の世楽しきところかな

## ●会員作品●

津波古 江津

一隅を林檎の蜜とおもいけり  
頭为天辺やさしくなりぬ冬の山  
巻き戻し不可ポケットの手が温い  
ほとけさま永きじかんを独楽まわす  
一月の半島しやがんだり仰いだり  
恙なくしがなく人はきさらぎぬ  
アロエの花あアぶらんこを漕ぐちから

坪内 稔典

ごぶさたの続いてばかり牡丹の芽  
雛かえす男になろう三月は  
キンカンは完熟ボクは半熟か  
家に壁人間に皮春うらら  
プラトンと名づけて飛ばすしゃぼん玉  
本日はあけぼのすみれこの窓辺  
ヤットオレ日本董学会員

中井 保江

樹木医になりたいと思う冬日和  
星冴ゆる羊七十匹が行く  
歩くたび鈴が鳴る鳴る初ゑびす  
大鷹よ胸の高さに来て留まれ  
大鷲の点になるまで風の中  
LED雪と恋とを青くする  
栓抜けるペンギンつづく春の海

中居 由美

木造の久野医院のルリマス  
水掻きが欲しいと思うクリスマス  
狐火と思えば狐火かもしれず  
枯木星リムジンバスに一人乗る  
ペンギンに水脈のある冬青空  
水音の早さ遅さよふきのとう  
木の芽風胎児くねりと翻る

● 会員作品 ●

中谷 三千子

埋め合せいつかするから牡丹鍋  
葉牡丹の文字盤未太りだす  
雲掴めそうなベランダ柿を干す  
就活のポケット使い捨てカイロ  
マスクして特定秘密保護法案  
鱒池の鱒釣ってますいただきます  
春埃金剛力士の力瘤

長沼 佐智

あの人をちよつと忘れて寒夕焼  
淡雪や小部屋の奥の奥の箆  
文字を書く知らぬ文字あり光悦忌  
少年かそれとも老女春の月  
ラプソディインブルー春はブルーの処から  
春は曙ルンバは踊るスペースを  
ミルクキャラメル二粒くらい二月尽

中林 明美

忘年会アンドロイドが駆けて行く  
銀色のシャーペン信楽線動く  
フェリーから見えて大きな干し布団  
正月の首出している露天風呂  
冬晴れの四角に坐る盲導犬  
嘶きのひときわ青し甲斐の馬  
朧夜のイブモンタンに針を置く

中原 幸子

あんパンは毎日ふきのとうぼつぼつ  
毎日毎日毎日夏で朝ごはん  
名残り柚子ふたつ並んでいる暮らし  
十二月きつねうどんの骨つぷし  
飛ぶものに月日蕪にあるしつぽ  
寒の風呂胸にざんぶり母のこと  
肉じゃがをつくろう君は雪だから

## ●会員作品●

梨地 ことこ

神よ、カメムシも彼もゆるせと？  
帰るのは火鉢のよこの母のまえ  
アドレスは熱燗二合カバなひと  
雪だろうチェンバロだろう泣くだろう  
冬の蠅老人だったかつんのめる  
聖夜かな蕎麦湯のんでるおじいさん  
手を挙げた雪割草のようなひと

南北 佳昭

子規庵の九月を刻む古時計  
機影ありちぎれ雲あり秋の池  
日本全国靴下の日は雪  
初釜や富士の構えに揺るぎなく  
冬うらら露天の店の品定め  
人待ちの伏見船宿冬の雷  
如月や人の気配に振り返る

東 英幸

その昔恐竜だった蒟蒻掘る  
明かりから少し離れて狐啼く  
寒林の遠くから来る水の音  
コンサイス昨日の雪の降り止まず  
寒北斗生あるものの美しく  
底冷えのするコンビニの明るさよ  
着ぶくれて東京駅を出てゆけり

火箱 ひろ

小春日やみんなのつぽのお葬式  
場所柄をわきまえておく冬の蠅  
冬ノ星トモニ眺メル友求ム  
お年賀のこれは何やらひらべった  
さつき見たあいつやっぱりイタチだろ  
かいつぶりどこかで咳をしていたり  
冬眠の亀や蛙やご隠居や

● 会員作品 ●

陽山 道子

日脚伸ぶこころ手足のかたちして  
淡海の海眩暈のように牡丹雪  
コンビニのコーヒー片手春の雷  
不束ですが草の芽の数珠つなぎ  
冴え返る木の階段の黒光り  
恙なし藁筒に立つ紙雛  
百歳を背筋正して紙の雛

平川 陽三

怒らない母薄化粧お元日  
げこ愛し昼日中からうきねどり  
割込みはダメーヨダメダメ掘炬燵  
椋鳥の餌を奪ひ合ふ寝正月  
特売の団子干乾び建国日  
立読みにえつへんえつへんとちゃんちゃんこ  
背を向ける女雛をもとに戻さねば

夕暮や象の背中の春の土

一家に一台原子力おでん鍋

老人の乾いてしまう日向ぼこ

冬の蠅老人だったかつんのめる

美しいお尻を作る一葉忌

そこはかとなく腹立って春キャベツ

壁ドンも天ドンも好き冴返る

今男ありけりココア作りおり

船が船追いこすところ春隣

海鼠の日石川くんの歯が抜けた

なずな咲くわたし喧嘩をさぼってる

もし死ぬとすれば沖見で蜜柑山

カーナビはここでおしまいなずな咲く

けんかせよなぐつたあとはみかんむけ

しゅんぎくがだいすきそれでかんらんしゃ

高田留美

知念哲庵

寺田良治

梨池ことこ

苗田 苗

野本明子

長谷川博

水木ユヤ

渡部ひとみ

赤石 忍

梅田千種

岡野泰輔

香川昭子

久保敬子

桑原汽白

今号の 15 句

坪内 稔典

うそのようだが、抜群におもしろいのはことさんの蠅。ほんとうにそうだ、と思いがら笑ってしまったのは良治さんの老人。感心したのは苗さんの一葉忌のお尻。一葉忌のお尻は、みなさん、きれいにしてください。海鼠の日って、あつ、石川君の歯の抜ける日だ。ユヤさんの今業平、哲庵さんの現代の真実、なにやら分からないけど共に暴力的なエネルギーを感じるひらがなの二句。いずれもおもしろい。そして留美さんの意外な春の土ひとみさんの映像的ドラマ、博さんの諧謔と泰輔さんのしみじみとした光景も楽しめる。「落葉に口なし」（たかはしまさお）、「十二月きつねうどんの骨っぷし」（中原幸子）、「入れ智恵をされ蓮根の穴だらけ」（ふけとしこ）、「四年物のこんにやく芋と冬籠」（水上博子）、「頬杖の気分ポインセチアの気分」（敷ノ内君代）、「伊予柑を下さい私ひとりなの」（朝倉晴美）、「数え日に何で六人いるんだよ」（岡野直樹）など面白い出来た。